

CDなどに入っている音は 生で聴くのと違う音

なので生と同じ音で再生することは元から不可能！
さらにそもそも『絶対的な生の音』はない。



オーディオは、実にemotionalなものであると同時に、人間の聴力、たとえば特に可聴周波数範囲に限界があり、中高年になると、なんと15,000Hzくらいまでしか聞こえませんし、音の分解能も低下します。そのために、いくらハード的に超高性能な装置が開発されても、その能力の全てを人の耳でフルに判別できるということはありません。測定器なら容易に区別がつきますが。しかし、きちんと基本から設計されて、世界でトップクラスの高性能な高価なパーツを多用していて、装置の外観も素晴らしいとなると、より素晴らしく聞こえるものなのです。これは『オーディオ界におけるプラシーボ効果』と筆者は呼んでおります。試しに、50万円のアンプと300万円のアンプをブラインドテストしてみてください。各人の音の好みもあり、全員が300万円のアンプの方が50万円のアンプより6倍良い音がするとは言わないでしょう。

しかし、パンフレットに書いてある非常に高性能な歌い文句や仕様を読み、装置の素晴らしい外観や非常に高級な電源ケーブルやXLR

などのインターコネクト・ケーブル類を、ちらちら眺めながらレコードを聴くと、視覚的な面と本来の聴覚的な面との相乗効果で、オーディオに陶酔し、とても満足するものなのです。それには、どうしてもある程度の予算が必要になるのは止むを得ません。

オーディオ界のもう一つの大きな永遠の課題は、『目標は再生音を生の音に限りなく近づける』ということです。この問題点は以下のようにあり、そもそもレコードやCDなどに入っている音は、生の音を収録して人工的に色々加工してあり、最初からすでに生の音ではありませんので、それをいくら忠実に再生しても生の音にはなりません。

★装置の設計者が、あらゆるジャンルの音楽を生で聴きまくっているわけではないので、生の音に限りなく近づけると言っても、本当の生の音がわかっていないから不可能です。ユーザーは、クラシック、ジャズ、ポップス、ヴォーカル、演歌など、聴く音楽のジャンルはまちま

ちであり、こんな広い範囲の全てを聴きまくることは、とても無理です。

★逆にユーザーの方も、生・生とうるさいのに、生の音を聴きまくっている人は少なく、例えば一例をあげると、クラシックファンで、『カラヤンの指揮するベルリンフィルの音は最高だよ！』と言っている人も、現地でそれを生で聴いたことがある人は非常に少ないと思います。



熱狂的なクラシックファンの常道：『イエロー・レーベル』のドイツグラモフォンのレコードをSPUシリーズのカートリッジで音を拾い、真空管アンプで増幅してタンノイの大型スピーカーで聴くこと。

★以上の二点から、『本当の生の音』なるものが現実には、装置の設計者もユーザーもあまり正確に認識できていないし、各ホールによって音響のパラメーターは異なるので、『生の音』を一般化して、あまりうるさく言っても、それほど大きな意味はないのです。

★コンサートホールで、実際にある音楽を生で聴く場合、残響があるので、あらゆる方向から音が聴こえてきますし、録音する時とは違って、各楽器の音は自然に聴こえてきます。しかしながら、それらの音を録音してレコードやCDにする場合は、マイクは各パートごとにオンマイクにセットされており、ピアノの場合にはマイクがピアノの中に突っ込んであり、各楽器の音が鮮明に聴こえるように操作しておりますし、各パートの音をレコード製作者(ミキサー)が自分好みにミキシングして仕上げることが行なわれており、既にこの時点でコンサートホールで生の音を聴くのととは全く異なっているのです。さら

にパイプオルガンの音は、周波数レンジも全楽器中で最大であり、ものすごい迫力で、筆者は大好きで欧米の古い大きな教会で時々生で聴きますが、教会の板製の硬い座席に座って、後方からパイプオルガンの音が長い残響と共に聴こえて来るのが、教会の生の音なのです。しかし、レコードやCDで家庭で聴く場合は、ほとんどの人は何も深く考えておらず、前方のスピーカーから流れてくるパイプオルガンの音を聴いていても何も違和感はないと思いますが、教会で生のパイプオルガンを聴きなれた者には、とても違和感があります。前方に祭壇、後方上部にパイプオルガンが設置されているのが常識ですから。この方向が前後全く逆であるということは、すでに生の場合とは全く配置が違うので、生の音を追求していることにはなりません。後ろ向きになって聴き、残響を何秒か付加しないと教会での生の音に近くはなりません。つまり首尾一貫性に欠けることを知らず知らずのうちに普通にしているということです。そのくせに、些細な本質的で

ない、どうしてもよいことにこだわるのがオーディオマニアの常なのです。

★従って、レコードやCDに入っている人の手で色々と加工された音をそのまま忠実に再現する装置はできるかと思いますが(ただしスピーカーによって音が異なる)、手を加える前のホールで自分が聴いているのと同じような感じのする生の音に変換する装置は、作れません。

★また、マイクを通した音と耳で直接聴く音とは明らかに異なります。業務用のマイクとして有名でよく使われているものとして、たとえば Neumann, Shure, AKG, Schoeps, など有名ブランドも色々ありますし、コンデンサーマイクとダイナミックマイクの違いや、単一指向性と無指向性の違いもあり、音の入力側のマイクにおいても実にさまざまであり、スピーカーと同様に、それぞれによって音が異なります。人間も同様に、人によって同じ音でも聞こえ方が違います。すなわち、

マイクによっても、聴く人によっても音が異なりますので、それぞれの音を絶対的な音として同一に認識することは現実にはできません。

★筆者は生録もしており、CDを何枚か製作しておりますので、マイクによる音の違いをよく理解しています。〇〇用のマイクとの分類あり。

★同じアーティストが同じ曲を演奏しても、コンサートホールが異なれば音も異なりますので、絶対的な生の音とは何かよくわかりません。

★そのようなことを補正をするために、いくつかのホールの音響特性のパラメーターがあらかじめ登録してあって、再生のときに選んでホールを指定できるアンプがあり、筆者は愛用しております。特に各教会を指定するパイプオルガン音楽には効果があります。一般にレコードでもCDでも、オンマイクで録音されているのか、教会で生で

聴くよりも残響が少なすぎてリアリティに欠けます。パイプオルガンの愛好家としては残念なことです。

★パイプオルガンの音は、ダイナミックレンジも周波数レンジも、全ての楽器中で最大であり、欧米の古い大きな教会で生の音を聴けばもの凄い迫力で、教会内全体が響いております。なので、家庭内のオーディオシステムでそのような生の音を出そうとしても、絶対に無理です。しかし、ピアノ、ヴァイオリン、オーボエ、フルートなどのような普通の楽器のソロであれば、家庭内でのオーディオシステムの再生音が、目をつぶって聴けば、まるで前で実物が鳴っているのではないかと錯覚するようなこともよくあるかと思いますが、パイプオルガンだけは、普通のオーディオシステムでは、そんな錯覚を覚えることは、まずないはずです。生のパイプオルガンの音を聴けばわかりますが、残響があらゆる方向から聴こえ、超低音になると教会の床が

少し振動し、空気の揺らぎもわかります。やはり究極の音は、パイプオルガンです。小型スピーカー2本だけでは、その再生はとても無理です。サブウーファーや前後上下にもマルチスピーカーが必要です。筆者は、パイプオルガンの音に陶醉して愛聴しております。

★結局のところ、各種メディアに入っている音は、すでに元に戻せない状態にまで生の音に色々と人手が加えられており、コンサートホールで生の音を聴いているのと同じ音をそのままに再現することは、そのようなメディアでは絶対に不可能であるということです。

★レコードやCDに入っている音そのものを忠実に再生する装置は作れるでしょうが、レコードやCDに入っている音を元の生の音に戻して再生するデコーダー(装置)は、いくらがんばっても作れません。

★コンサートホールで実際に聴いている音に近付けるには、人間の両耳の位置に各1本のマイクを置き、それで録音しないといけません。レコードやCD用などのために録音する時は、各楽器ごとにマイクをマルチマイク方式のオンマイクで行いますので、各楽器の粒立ちはよくわかりますし、迫力があるように加工されておりますので、コンサートホールで2つの耳だけで人が聴いている音とは明らかに異なります。このように、最初の段階からすでに生の音を直接人が聴くやり方と再生音用に収録して加工してレコードやCDにする方法とは明らかに違うので、そもそも両者の音は元から全く別物なのです。そんな両者は、たとえ何をしようと全く同じに聴こえるわけがありません。

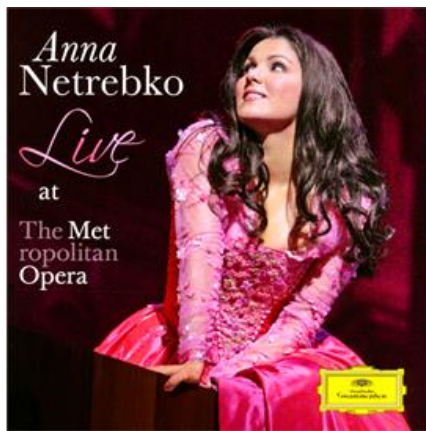
★一般に、レコードやCDに入っている音そのものは、現場で生で聴くものよりも迫力がありますが、教会のパイプオルガンの音だけは、その逆であり、生の方がずっと迫力があります。

★以上のことを総合すると、完全に純粹に真の生の音を聴きたければ、現地へ行くしか方法はないのです。これならパーフェクトです。

★結論としては、『生は生、再生音は再生音』でしかあり得ないので、そのように割り切って気楽にオーディオを楽しむのがよいでしょう。

★レコードやCDに入っている人工音の再生音を、生の音に近づけようと必死になって全く無駄な努力を続けるのではなくて、そもそも再生音は生とは全く別物なので、不可能なことは止めて、たとえばそのような人工音にさらに自分好みのように低音を強めるとか、リバーブを付けるとかするなど、自分の好きなようにさらに加工して、自由に再生音を自分流にして楽しめばよいのです。どうせスピーカーを変えれば、音はかなり変わりますし、絶対的な音とか標準的な音なんて存在しません。

★親友の一流のプロの音楽家もそうですが、一般にプロの音楽家は、物凄いオーディオシステムを持っていないのは、なぜでしょうか？その答えに重要な鍵があるように思います。



→ CD Player → Amplifier → Speakers → Human Ears

☞元から生の音ではないし、そもそも『絶対的な生の音』というものはない。同一の楽器・曲・演奏家であっても、会場などによって音色は異なるから。

【結論】CDなどに入っている音は、生の自然の音のみではなくて、色々と手を加えて『音作り』がされているので、たとえCDなどの音を忠実にオーディオ装置で再生できたとしても、決してそれは現地で生で聴いた時の音と同一ではない！ よって自分で生録をしてCDなどを自作するのでなければ、市販の音楽ソースを使う限り、生に限りなく近付けようと努力しても、『後の祭』で不可能であり、あまり意味がないのです。

